

郷土の芸術文化史を見直し、庄内にゆかりの作家を取り上げて紹介する展覧会です。シリーズ第14回となる今回は、明治に生まれ大正から第2次世界大戦後にいたる激動の時代に、伝統的な書画を心得とした松平穆堂と土屋竹雨、そして明治以降の庄内における書道の礎を築いた黒崎研堂を取り上げます。彼ら3人の作品はこの地域に多く遺されておりますが、本展覧会では致道博物館と荘内南洲会の所蔵品を中心に、屏風や掛軸などの詩書画を約60点展覧いたします。

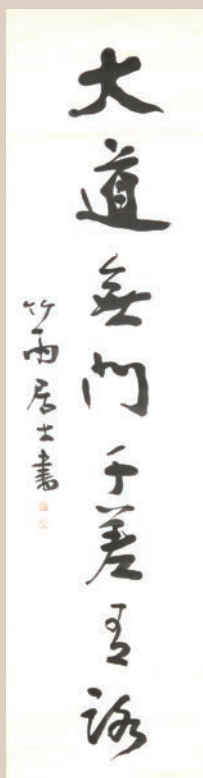


1

黒崎研堂 (嘉永5/6年~昭和3年)は、庄内藩家老を務めた酒井了明(のりあき)の3男として鶴岡の馬場町に生まれました。通称與八郎、名を馨といい、戊辰戦争の折には清川口の戦いに出陣し、明治元(1868)年に黒崎家の養子となります。維新後には旧藩士らと鹿児島に学び、のち松ヶ岡開墾に従事し、また荘内銀行の前身のひとつである済急社の社長や町会議員を務めるなど政財界の発展に貢献しました。一方で、幼少の頃より書に秀で、明治19(1870)年に書道界の第一人者、日下部鳴鶴が鶴岡に来た際に入門し、研鑽を積んで松平穆堂や吉田苞竹などの門弟を育て、書家として多くの足跡を遺しました。

松平穆堂 (明治17年~昭和37年)は、旧庄内藩土塚原権平の2男として東田川郡広瀬村猪俣新田の松ヶ岡(現、鶴岡市羽黒町猪俣新田)に生まれました。名を末吉といい、幼くして父親を亡くしたため、黒崎研堂の世話になって書道をはじめとする学問を学びました。山形師範学校(現、山形大学)卒業後、尋常高等小学校や高等女学校で教鞭をとり、その間、明治41(1908)年に松平久彰の長女定子と結婚し、松平家の養子となりました。大正5(1916)年、松平穆堂は教諭を依願退職し、中国に渡って約11年間書道研鑽に励みます。大正15(1926)年に帰国すると、書道同好会(のちに鶴岡書道会と改称)を結成し、また鶴岡高等女学校(現、県立鶴岡北高等学校)で教鞭をとって書道教育につとめ、昭和24(1949)年には第1回荘内書道展覧会を開催しました。書を極めるとともに漢詩への知識も深く、今もたくさんの遺墨を庄内の地で目にすることができます。

土屋竹雨 (明治20年~昭和33年)は、土屋久国の長男として鶴岡の家中新町に生まれました。名を久泰といい、荘内中学校(現、県立鶴岡南高等学校)を卒業後、仙台の旧制第二高等学校(現、東北大学)を経て、大正3(1914)年に東京帝国大学(現、東京大学)法学部を卒業しました。幼少のころより漢詩を学び、大東文化協会出版部に務めてのち、昭和3(1928)年に芸文社を創立して雑誌「東華」を出版して漢詩文活動を広めました。漢学、漢詩については当代第一人者とされ、独特の書風と絵で詩書画に通じ、昭和6(1931)年大東文化学院講師となり、同学院教授を経て学院総長となりました。第2次世界大戦後の昭和20(1945)年には、一時鶴岡に帰郷し、松平穆堂らと交友を深めており、郷土にも漢詩や書画を多く遺しています。終戦後は再び上京し、昭和24(1949)年、大学制度により新設された東京文政大学(現、大東文化大学)の初代学長となり、また同年日本芸術院会員となりました。



5



4



2



3

【図版】1. 黒崎研堂 秋風辞「秋風起白雲飛…」荘内南洲会蔵/2. 松平穆堂 一文字「虎」(篆書)個人蔵/3. 土屋竹雨「魚図」致道博物館蔵/4. 松平穆堂 二文字「鳳鳴」(篆書)個人蔵/5. 土屋竹雨 一行書「大道無門千差有路」致道博物館蔵

会期中のイベント

■ ギャラリー・トーク

内容：当館学芸員が会場を案内し、作品解説を行います。

日時：2月10日(日)、2月24日(日)

各回 午後2時~午後3時

参加料：無料 ※ただし、入場には観覧券が必要です。



※お車で越しの際は、荘銀タクト鶴岡、公園中央駐車場が最寄です(無料)

鶴岡アートフォーラム

〒997-0035 山形県鶴岡市馬場町13-3
TEL: 0235-29-0260(代表) FAX: 0235-22-6051
E-mail: info@t-artforum.net URL: http://www.t-artforum.net